訪問看護ステーション便り

No.11

問訪問看護ステーション
TEL32 - 2416

今月は、病院を退院したあと、住み慣れたご自宅で、ご家族に囲まれて最期まで過ごされた事例をご紹介します。

『最期まで住み慣れた自宅で過ごすことができたＥさん』

Ｅさん：85歳女性　終末期大腸がん　要介護３　４世代同居の大家族　主介護者：長女

入院して「終末期のがん」と診断されました。治療をして体調が落ち着きましたが、ご本人・ご家族ともに、苦痛を伴う検査などを希望されず、自宅での療養を希望されました。そこで、退院日から訪問看護が開始されました。

どのように過ごしたいですか

Ｅさん：自分が植えた花木を眺めながら過ごしたい。
ご家族：苦痛なく、自宅で過ごしてもらいたい。家族で協力して介護するけれど、困ったときは助けて欲しい。

退院後１カ月

生活のご様子

その日の体調に合わせてご自分のペースで、食事を召し上がり、トイレやシャワーにも行けました。調子のよい時は、車椅子で家の周りを散歩しました。

退院時、長女さんは、Ｅさんとお父さんのお世話・仕事・家事など役割りが多くお疲れの様子でした。ご家族の協力も得られ長女さんの負担が軽くなりましたが、体調の変化に対応できるかをいつも心配されていました。

訪問看護では…

週１回自宅に伺い、体調・生活の様子を観察しました。

トイレまでの途中にいすを置き、休憩するスペースを作ったら、ひとりで行けるようになりました。

長女さんの介護負担軽減の方法の相談・提案をし、不安時には24時間いつでも相談可能なことをお伝えしました。

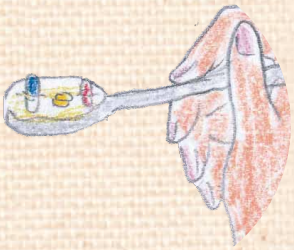
１カ月を過ぎたころから、体調に変化が出てきました

眠っている時間が増えたり、くすりが飲みにくくなったり、動くのにお手伝いが必要になりました。
体調の変化が１週間より短い期間で見られるため、訪問看護の回数を増やしました。

苦痛のないように

＜痛みがなく　夜眠れるように＞

・薬が上手に飲めるように、ゼリーを薄くスライスし、スイカの種のように埋め込みました。
・背中や手足のマッサージをしながらお話を聞きました。
・楽に眠れるようにエアーマットを借りました。



やりたいことを、やりたいように

・手足のむくみや冷感があるため、動きや感覚が鈍くなりました。それでもトイレに行きたいので、手足浴やアロマオイルでマッサージをしました。娘さんも出来るように、一緒に行いました。
・お風呂が大好きなので、ケアマネジャーと連携し、訪問入浴を利用することができました。
・仏さまへのお参りは、車椅子で行ったり、ベッドの上でだったり、体調に合わせて行いました。

ご家族の不安を軽くするために

体調に応じて、必要な時に必要なだけ（予定の訪問以外でも）伺えることや、24時間いつでも連絡できることを説明しました。また、心や身体がどのように変化していくのか、その対処方法をパンフレットを用いてお話ししました。

介護の負担が大きくなった時には、「サービスを利用して日中は休む」という方法もあることを提案しました。

自宅での看取りを希望されていますが、呼吸困難や痛みなどの症状が強く出た時や介護が難しくなった時など、いつでも変更が可能であることをお伝えしました。

Eさんは、退院後１カ月半、ご自分で作った庭の花木の見える場所で、ご家族をそばに感じながら、痛みや苦しみもなく過ごすことができました。

お別れの前日には、ご家族がベッドのまわりに集まって声をかけられ、Eさんもたくさんお話をされました。また、夜はご主人のベッドに足をいれて温めてもらいながらゆっくり眠られました。

ご家族は、Eさんの希望を最優先し、主介護者の長女さんの負担を大きくしないように協力し合い、支えていました。

絵：HANA